



中山 太洋 (なかやま たいよう) 第一中 2年生

作品名：生きる

図 書：聖の青春

「生きる」上で、大切なのは何だろうか。長生きすることや夢を叶えること、富や名声を得ることが、輝かしい人生の生き方だと思っていた。この本に出会うまでは。

私が読んだ『聖の青春』は、かつて将棋界の最高峰 A 級まで昇りつめた、村山聖の生涯を綴ったノンフィクションである。好奇心旺盛で元気な聖が難病のネフローゼと分かったのは、五歳のとき。入院生活は、同室の友達が亡くなることさえ珍しくない環境。そんな聖にとって、ベッドの上でもできる「将棋」は、限りなく広がる空であった。そして、「名人になる」という夢の翼を見つける。数々の戦いを制し、名人まであと少しというところで、大きな試練が待ち受ける。進行性膀胱癌である。聖は、A 級在籍のまま、名人の夢半ば、二十九歳という若さで亡くなってしまった。

聖の将棋にとって、師匠の森の存在は、必要不可欠であった。プロ棋士を目指す聖は十三歳で親元を離れ、師匠の森プロと生活する。森は時に、病に倒れた聖を寝ずに看病したり、パンツを洗ったり、聖にとっては第二の親であり、兄弟であり、友人のような深い結びつきがあった。人生の時間の重みを知った聖は、全ての命の尊厳を守りたいと思うようになり、伸びようとする爪や髪にまで、「どうして、せっかく生えてくるものを切らなくてはいけないのだ」と泣きわめいた。そんな聖の純粋な人柄に、森は魅せられたのだろう。

名人への道は、スピード昇級はするものの、病との闘いも付いて回り、対局を終えた後は必ずといっていいほど寝込んだ。聖にとっての将棋は、精神だけでなく、肉体も追い込むものであった。しかし、医者に叱られても入院せず、何度も将棋の舞台上がる。聖はどうしてそこまで戦い続けたのだろうか。聖にとって、収入や名声はどうでもいいことで、思うことは「命あるうちに名人になる」ただそれだけだったからだろう。

この本で、一番印象に残った場面は、聖と友人の加藤が殴り合いのケンカをする場面だ。奨励会での辛い日々を共にした加藤が敗戦し、年齢制限のため退会しなければならなくなった。泥酔した聖が「加藤さんは負け犬です。僕は負け犬にはならない」と言い放った。このとき、二人とも涙を流しながら睨み合っていた。聖は、本当は加藤を殴りたいわけではなかったと、私は

思う。夢を諦めなければならない加藤を目の当たりにして、自分の夢も潰えてしまうような気持ちになったのではないだろうか。聖は、森に「人生や運命に対する無力感は誰にでもある。それは村山君がしたようにしか表現できないのかもしれない」と言われ、必死に涙をこらえた。この森の言葉に、聖はどれだけ心が救われたことだろう。森の聖に対する大きな愛情を痛いほど感じ、思わず目頭が熱くなった。

「心が救われる」とは気持ちがほっとして和らぐことであるが、はっと思い出した。二年前のことを。

私は中学受験に失敗した。大好きなサッカーを封印し、クラブを休部して、友達と遊ぶことも我慢してまで勉強し、塾にも毎日通った。「志望校に合格する」ただそれだけを目指し、小学生最後の一年を過ごした。しかし、合格発表の日、掲示板に私の番号はなかった。体中から血の気が引いて、何かがガタガタと音を立て崩れ落ちていくような気がした。人生が終わった、とさえ思った。行き場のない悔しさと虚しさを、どこにぶつければいいのかわからず、布団にくるまり泣くしかなかった。翌朝、足どり重く学校へ行き、笑顔の消えた私に対して、担任の村野先生が、こう声をかけてくださった。「結果は不合格かもしれないけど、合格に向かって一生懸命に努力した姿は素晴らしいよ。」先生の言葉に、私は心に絡まった重たい鎖が解き放たれるような気持ちになった。先生は、森が聖に愛情を注いでいたように、私にたくさんの愛を与えてくださったのだ、と気づかされた。あの努力は無駄ではなかった。

聖の夢、「将棋の名人になること」は叶わなかったが、死ぬ間際まで、その夢を諦めることはしなかった。最後の言葉、「2七銀」。聖が「死」に対しても負けることがなかったからこそこの言葉だ。将棋と病に生きぬいた聖の人生は、輝いていたし幸せだったと思う。

夢を叶えるために、その道のりが険しいほど、喜びや落胆も大きくなるが、その人の人生を作るのは、そこまでの道のりなのだと感じた。つまり、人生とは、どれだけ生きたか、どんな結果を残したか、ではなく、「どう生きるか」だということ。この本が教えてくれた。

私は村山聖のように、命をかけても手にしたい夢があるだろうか。いや、まだない。見つけたい。夢という翼を。